

「路右^{ろう}さんが女と別れた」

その話を優姫が聞いたのはつい三日前のことだ。

路右が経営しているホストクラブで働いている男が教えてくれた。その人曰く、ひと月ほど前から別れそうな雰囲気だったそう。

今回はどのくらい持ったか優姫は記憶を辿る。たしか付き合ってたまだ三ヶ月くらいのはずだ。

路右がやっとフリーになった。

優姫は心臓がどくんと大きく脈打つを感じた。自分でも驚くほど、それは明確な歓喜だった。

優姫は、買い物に行くのをやめてまっすぐに家に帰ることにした。路右の周囲には綺麗な女がたくさんいて、相手から寄ってくる。

そのため、別れてもすぐに彼女ができてしまうのだ。

……アクションを起こすなら今夜しかない。準備をしなくては。

優姫は手をきつく握りしめた。

その日の夜、家に帰ってきた路右は珍しくひとりで酒を飲みはじめた。

二十一歳の優姫よりも二十歳ほど年上の路右は、細身だが筋肉質で、大人の色気が漂っている。その姿に優姫は息をのむ。

「……路右さん、飲み過ぎじゃない？」

路右は酒に強いほうだが、今日はいつもよりも飲んでいる。目尻が少しだけ赤い。

ソファに深く沈み込み、グラスの中の氷をからからと鳴らしながら、路右は遠い目をしていた。

「飲みてえ気分なんだよ」

「……なにかあった？」

優姫が隣に座ると、路右はちらりと視線を寄越したが、すぐにまた酒に戻る。

なにも答えない。切れ長の目と眉間に寄った皺。

一見怒っているようにも見えるが、優姫にはどこか寂しげに思えた。

「別れたんだよ」

「でもいつも彼女と別れてもやけ酒なんてしないよね」

それほど真剣に好きだったのだろうか、優姫はずきりと胸が痛む。

「……お前が」

なにかを言いかけて、路右は舌打ちをした。

「え、私がなに？」

「はあ。……お前と一緒に住んでんのがおかしいってさ」

「おかしいって……」

「普通二十歳くらいの女と一緒に住まないとかなんとか、うるさくてな」

優姫は路右と同居している。

それは行き場のなかった優姫のために、路右が手を差し伸ばしてくれたからだ。

「……ごめん、私のせいで」

「ちげえよ。俺が気に食わなかったのは、俺たちのことに口を出そうとしてくることだ。勝手に決めつけて、お前を追い出させて文句言う

から喧嘩になった」

「やっぱり私のせいじゃん」

路右のことが好きだが、自分が理由で彼女と別れてほしいわけではなかった。

優姫は自分の恋が成就しなくとも、路右が幸せならいいと思っていたのだ。

「だから、ちげえって」

優姫はお詫びの気持ちを込めて、路右のグラスに酒を注ぎ足す。路右は「おう」と短く言って、それを煽った。

喉仏が上下するのを、優姫はじつと見つめる。

四十歳の男の、無骨で、それでいてどこか色気のある仕草。

優姫はこの人の全てが好きだった。

二年前、父の暴力に耐えかねて家出をした。もうどうでもよくなつて、雨の中路地裏で蹲っていた。

路右は優姫を見つけて「おい、ガキ。こんなところで寝てたら死ぬぞ」とだけ言つて、手を差し伸べてくれた。

その手が、優姫の全てを変えた。

事情を聞いてくれて、ちゃんと生きていけるようにと色々と相談に乗ってくれて、家にまで住まわせてくれていたのだ。感謝してもしきれない。

優姫は路右のグラスを奪い、一気に飲み干した。

「おい」

酒の勢いを借りなければ、きっと一生言えない。

「路右さん」

路右は優姫の方を見つめている。鋭い目だが、その奥にある優しさを優姫は知っている。

「私じゃ、ダメですか？」

優姫からグラスを奪った路右の手が止まる。そしてそのまま、グラスがソファに転がった。

「……お前」

その視線に射抜かれて、優姫はもう後戻りできないことを悟った。路右はしばらく沈黙した後、低い声で言った。

「酔いすぎだ」

遠回しの拒否だ。優姫はわかっていた。路右なら、大人として優姫を諭すだろう。

「俺が別れた理由はお前が気に病む必要なんてねえよ」

「違う。そうじゃなくて」

優姫は路右の顔に手を伸ばす。強張った頬に触れると、路右は眉を顰めた。

「おい」

優姫は構わず、路右の唇に自分の唇を重ねた。

「——っ！」

酒の味がする。ほろ苦い。けれど、路右との初めてのキスだと思うと、そのほろ苦ささえ優姫は愛おしくなる。

路右は一瞬固まったが、すぐに優姫の肩を掴んで引き離そうとする。けれど優姫は抵抗した。

必死に、路右の唇を貪る。遊び慣れた路右にとっては下手くそなキスだろう。

それでも、好きだと想いを込めて何度もキスをした。

「おい、優姫」

「路右さん、お願い。一度でいいから……抱いて？」

優姫の目は潤んでいた。路右は深く息を吐き、頭を掻いた。

「……お前な、俺はお前よりかなり年上だぞ。それに、お前は俺のことを兄貴みたいに思ってるんだろ。こういう悪ふざけはするもんじゃねえ」

「ふざけてなんてない」

優姫は首を振った。路右のシャツの襟を掴み、縋るように見上げる。

「お願い。私、路右さんにずっと抱かれたかったの。お兄ちゃんなんかじゃない。路右さんが男の人として本気で好き」

路右はなにかを言いかけて、口を閉ざす。そして、深く重いため息をつく。

優姫は路右の反応を待たずに、震える手で路右のベルトに手を伸ばした。金属のバックルを外す。

「っ、おい！ やめろ」

路右は抵抗するが、優姫は止まらない。

ジッパーを下ろし、中に手を入れる。まだ柔らかいペニスに触れた。

「くっ……」

優姫はそのまま、ズボンと下着をずり下ろし、路右のペニスを口に含んだ。優姫は一生懸命、舌で舐め上げる。

「は……っ」

路右の手が、優姫の頭に置かれた。

押しつけるわけでもなく、離されるわけでもなく、ただ触れている。

「……くっ、優姫、やめろ」

「路右さんの精液、飲ませて？」

優姫が上目遣いで見上げると、路右の顔がほんのり赤くなっている。普段は余裕のある路右が、こんな表情をするなんて。

優姫は愛おしさが一気に込み上げてくる。

路右は優姫の髪をぐしゃりと掴み、引き離した。

「お前、変態だろ」

そう言って、優姫の顎を掴み、強引にキスをした。

下手くそなキスとは違う。路右の舌が優姫の口内に侵入し、歯列を

なぞり、舌を絡めとる。

「んっ……あ♡」

甘い声を漏らしながら、路右にしがみついた。

「お前、後悔すんなよ。本気で抱くからな。泣いてもやめねえぞ」

「……うん、めちゃくちゃにして」

路右の目が、危険な光を帯びた。優姫はその目に射抜かれて、全身が熱くなる。

路右は優姫の服を乱暴に脱がせ、そのままソファに押し倒した。逞しい体が覆いかぶさる。

路右の手が、優姫の胸元に触れた。ごつごつとした指が、優姫の胸を揉みしだく。

「あっ♡」

「ここ、感じんのか？」

路右は優姫の乳首を指先で転がしながら、もう片方の乳首を舌で舐め始めた。ちゅぷ、と音を立てて吸い付く。

「ああ♡ あ♡」

優姫の口から、甘ったるい声が漏れる。自分でも驚くような声だった。路右は優姫の乳首を舌先で弾き、軽く噛む。

「ひゃっ♡ だめっ♡」

「だめじゃねえだろ。感じてるくせに」

路右は執拗に乳首を攻め続ける。舐められ、吸われ、噛まれ、優姫は体をびくびくと震わせながら喘ぐ。

「だめ、だめっ♡ そんなに舐められたら……ああああっ♡」

「うるせえ」

路右は優姫の言葉を遮るように、乳首を強く吸い上げた。

ちゅぽと音を立てて離すと、優姫の乳首は赤く腫れ上がっていた。

「すげえな」

路右は満足そうに笑い、優姫の腕を掴むと強引に寝室へ連れていく。

そしてベッドの上に押し倒し、優姫のズボンに手をかけた。すると脱がせると、優姫の下半身が露わになる。

優姫は既にぐしょぐしょに濡れていた。

路右はそれを見て、ふっと笑う。恥ずかしくなり、優姫が足を閉じようとするのを力強い手で掴まれた。

「おい、足閉じるな。全部見せろ」

路右は優姫の足を開かせると、蜜口に手を伸ばした。

指が触れた瞬間、優姫は「あっ」と声を漏らした。

路右の指が優姫の中に沈んでいく。中はすでにとろとろで、路右の指をすんなりと迎え入れる。

「ああ♡」

「……お前、ここ濡れすぎ。まさか俺のをしゃぶってるときから、こんなだったのか？」

「んっ♡ だって……っ、ずっと路右さんに抱かれたかったから、んうっ♡ ああっ♡」

優姫の言葉に、路右は一瞬動きを止めた。

「……マジで変態だな」

路右は指を二本に増やす。優姫の中をぐちゅぐちゅと掻き回しながら、指を曲げて最も敏感な部分を探る。

「ひう♡」

優姫は声を上げ、腰を跳ねさせた。

「ここか？」

「あっ♡ ああっ♡ そこ、だめえ♡」

「わかりやすいやつだな。ここがいいんだろ？ ほら、素直に言え」

路右は指でぐりぐりと刺激する。優姫は快感に頭が真っ白になりながら、必死に首を振った。

「だめ、だめえ♡」

「あ？ 嫌ならやめるぞ。してほしいならちゃんとねだれ」

「……っ、路右さん……っ、もつと……そこぐりぐりして……あああ

ああああ♡ イっちゃう♡」

「イけよ」

「あう♡ あっ♡ あああ♡ あああああああ♡」

路右が指を激しく動かすと、優姫はあっけなく達してしまった。体を震わせ、蜜口からはとろとろとした愛液がさらに溢れ出てくる。

路右はそんな優姫を見下ろしながら、自分のペニスを優姫の蜜口に当てがった。

極太の血管の浮いたペニスを見て、優姫は少し怖気づいた。

けれど、念願の路右とのセックスだと思いと、うれしくてたまらない。

「挿れるぞ」

路右は優姫の返事を待たずに、腰を進めた。優姫の中に、路右のペニスが沈んでいく。

「あ……う♡」

中を押し入ってくる圧迫感に優姫はシーツを掴んだ。

路右は優姫が慣れるのを待たずに、一気に奥まで突き入れる。

「あぁん♡ あっ♡」

「……っ、締めつけがきついんだよ」

路右はそう言って、腰を引くと激しく突いた。

ゴツゴツと奥を突かれるたびに、優姫の頭が真っ白になる。

「ひぁ♡ あぁぁん♡」

路右の腰の動きは速く、重い。優姫の体はソファの上で跳ね、頭が揺れる。

「あっ♡ あぁっ♡ 奥、らめっ♡」

「だめじゃねえだろ！ お前から誘ったんだからへばんじゃねえよ！

おら！」

「あう♡ あああ♡」

路右はより深く突き刺す。ぐちゅぐちゅと音を立てながら、優姫の最奥を、路右のペニスが決る。

「あああああああん♡」

悲鳴のような嬌声を上げた。目尻からは涙が溢れ、頬を伝う。

「あっ♡ ああっ♡ すごい、そこ……っ♡」

「……ったく、お前感度良すぎだろ」

「ああ♡ あっ♡ あう♡ あああああ♡」

路右は優姫の反応を見ながら、角度を変えて突く。

優姫はそのたびに体をびくびくと震わせ、達してしまふ。いきっぱなしの優姫に、路右は容赦しなかった。

「あう……あつ！　待って、今イったばっかだから……ああ♡　ああ♡
ああん♡」

優姫のクリトリスを摘み、奥を突き続ける。

「あっ♡　ああ♡　はう♡　あひっ♡　ああああん♡　両方、だめえ♡」

「あ？　気持ちいいんだろ？　なにがダメなんだよ！」

「あああっ♡」

路右は優姫のクリトリスをぐにと潰しながら、腰を打ちつける。

優姫は二つの快感に翻弄され、もう何が何だかわからなくなっていた。

口からはだらしなく涎が垂れ、目はとろんと潤んでいる。

「ひう♡　あっ♡　ああ♡　あああん♡　おかしくなっちゃう♡」

「っ、なれよ！ 俺にこうしてほしかったんだろ？」

「あっ♡ してほしかったあ♡ もっと激しくしてえ♡」

優姫の言葉に、路右の理性は完全に溶け去った。

「このど変態が」

路右は優姫をひっくり返し、後ろから突き始めた。

優姫の背中に覆いかぶさり、耳に舌をねじ込みながら、中を激しく突く。

「はう♡ あああああ♡」

「お前のここ、すげえ締めつけんだよ。俺のチンポ、離したくねえみてえに」

「あっ♡ だって、路右さんの、少しでも長く中に入れてほしいから……っ♡」

「おら！ イけ」

「あああああん♡ あっ♡ あああああ♡ もう、無理い♡ 何度も

イってるのにい♡」

「まだイけるだろ！ ほら、中に出してやるからもう一度イけ！」

路右の手が優姫の乳首を摘み、腰の動きが速くなる。

「ひう♡ らめっ♡ あああ♡ ああああああっ♡」

優姫は声を上げ、体を激しく震わせた。

「……っ、くっ」

路右は低く唸り、優姫の最奥に精液を注ぎ込んだ。

どぶどぶと熱い感触が優姫の中に広がる。優姫はその感覚に、また達してしまった。

「あ……う♡ 路右さんっ♡」

路右はペニスを抜き、優姫の隣に倒れ込んだ。

優姫の中からは、白い精液がとろりと溢れ出る。

優姫は乱れた呼吸を整えながら、路右の方を向いた。路右もまた、荒い息を吐いていた。

優姫は体を起こし、路右の唇にちゅつとキスをする。

「路右さんの……いっぱい中に入ってる」

「……お前、わざと煽ってんだろ」

路右のペニスは、まだ硬さを保っていた。優姫はそれを見て、にこりと笑う。

「だって、路右さん、まだ足りないんでしょ？」

「生意気なんだよ、お前」

路右は優姫の顎を掴み、強引にキスをした。そして、優姫を再び押

し倒す。

「後悔すんなよ」

「してないよ。これ以上ないってくらい今幸せ」

路右は舌打ちをすると優姫の足を開き、再びペニスを挿入した。
さっき注がれた精液が、ぐちゅぐちゅと音を立てる。

「ああ♡」

路右は優姫の乳首を舌で舐めながら、突き始めた。

「ああ♡ あっ♡ ああああん♡」

「……お前、またイったな？ 早すぎだろ。淫乱な身体してんな」

「んっ♡ 路右さんに、されるから……っ♡ 路右さんが、好きだからっ♡」

優姫の告白に路右は舌打ちし、より激しく突いた。

優姫は涙を流しながら快感に浸る。

「あああああ♡ あん♡ ああああ♡」

路右の手がクリトリスに伸び、指先で摘みながら中を突く。二つの快感に、優姫の意識は飛びそうになる。

「ああああん♡ 両方だめえ♡」

「あ？ 気持ちいいんだろ？ さっきもこれでイってたじゃねえか。なにがダメなんだよ！」

パンパンツと音を立てながら、路右の腰が激しく動く。

優姫の体はベッドの上で激しく揺れ、頭が何度も枕にぶつかる。

普段路右が使っているベッドから彼の香りがして、優姫はそれだけで感度が上がってしまう。

「ひう♡ おかしくなっちゃう♡」

「っ、なれよ！　こうしてほしかったんだろ？　そう言ってたよなあ？」

「あっ♡　してほしかったあ♡　もっと激しくしてえ♡」

優姫の言葉に路右は優姫の耳に舌をねじ込みながら、乳首をいじり、さらに激しく突いた。

「これも好きだよな」

「あああ♡　すきい♡」

「はっ、お前弱いとこだらけじゃねえか」

「はう♡　あああああ♡」

優姫は大きな声で喘ぎ、体を仰け反らせる。

「お前の中、すげえ熱い。俺のチンポ、溶けちまいそうだ」

「あっ♡　路右さんの、おっきいの、すごく気持ちいい♡」

「そら良かったな。ほら、もっとイけよ」

路右の腰の動きがさらに速くなる。肌が重なり合う音と、卑猥な水音がぐちゅぐちゅと部屋の中に響く。

「あ♡ ああ♡」

声が掠れるほど喘ぎながら、優姫は再び達した。

体がびくびくと痙攣し、絶頂が止まらない。

路右はそんな優姫を見下ろしながら、さらに激しく突き、優姫の最も奥を何度も何度も抉る。

「ああ♡♡ 路右さん、もう、無理……っ♡ 本当に壊れちゃう♡」

「壊れろよ。お前をめちゃくちゃにしてほしいって言ったんだろ」

路右は優姫の足を抱え上げ、最も深い場所にペニスを突き入れた。